

## エミール・ラスクの『判断論』と西田幾多郎 IX

## “Die Lehre von Urteil” (The theory of judgment)

by Emile Lask

## and the Philosophy of Kitaro Nishida.(IX)

大熊 治生

Haruo OHKUMA

今回ここで見ていくのは、前回の続き、ラスク『判断論』第二章「超対立性」の第一節「判断構造の人工性とその対象—論理的領域からの距離」の後半部分である。第一章の「価値と価値意識の形成される構造」の解明に続いて第二章では、価値・無価値という対立を超えた「超対立性（超対立的なもの）」を通して、価値・無価値が意味を持つ、と考えられた。そしてその第一節では「対立的価値特質がそこに基づくところの構造諸要素の共属と非共属の本質を、より詳細に研究」する事が述べられる。第一節の表題は「判断構造の人工性とその対象—論理的領域からの距離」となっているが、今回見る部分は、その中の「非対象的現象の論理学としての“形式的”論理学」「カントにおける判断形式に対するカテゴリーの関係」「形式的論理学と先験的論理学の区別を通して限定された形式概念と素材概念の二重性」とされているところである。ラスクによれば「非対象性とは諸対象に対する距離を意味するのだが、それは・・・対象に到達しない、という意味での距離」なのである。つまりそれはカントの「物自体」との関連も考えられるが、アリストテレスの云うような「個物」からの影響も考えられる。主体の側からは「到達」することのできないそれらの対象を、どのようにして把握することができるのであろうか。本論文ではこれについて詳述する。

(s.109)我々は重要であるものをばらばらにしてしまうような脚注によってその事態を理解することはほとんどできない。不正に、或いは正しく存在している関係の中に対立的正当性、真理、妥当性を混入することはできない。素材はやはり「自らの」カテゴリーの中

連絡先：大熊治生 hokuma@cis.ac.jp

千葉科学大学薬学部薬学科

Department of Pharmacy, Faculty of Pharmacy, Chiba Institute of Science

(2009年10月1日受付, 2009年12月3日受理)

に存し、カテゴリーは「自らの」素材を把握するのだと考えられている。「自らの」カテゴリーとか「自らの」素材といったものはそのときには、妥当な或いは正しい仕方で真理における該当する要素にふさわしいものとして、または相応する、或いは要求された対立する分枝として現れるのである。

したがって原像的領域の無対立性に対しては、いかなる抗議も取られえない、というのは次の事情によるのである。それは即ち、認識が対象的関係を自らに対して表象しようとするかぎり、認識は常に対立的肯定

性をとおしてその諸関係を書き換えるように誘惑されるということなのだ。諸対象を捕捉することは、まさに常に切り刻まれた要素を引き離すこと、そしてそれを後からうまく適合させることと結びついている。諸対象は判断の客体へと改造される。つまりその肯定的、または否定的な質に対しては、決定が達しないところの形成物へと改造されるのである。しかしこのことがいったん洞察されると、根源的な無対立的な構造を判断客体の尺度として回復させることは何時でも可能なのである。あらゆる判断作用の直接的「客体」は決して「諸対象」それ自体ではなく、そこにおいて諸対象が既に形をゆがめる構造の付加物によって覆われているところの形成物なのである。

序論に於いて次のような主張が一即ち対象的現象と非対象的論理的現象との間の間隔を通して論理学総体の基本的分析は決定されるのだという主張が一提出されたのだとすれば、(s.110) 今や非対象性の原因となる人為性の本質が、より厳密に特徴づけられたことになる。今や判断領域と先験的現象との間の関係も更に追及され得る。

模像的領域のこのような人為性が洞察される時にはじめて、判断の非対象的「形式」が、どんな意味で対象的「質料」に対立しているのかということについての明瞭性が獲得される。というのは、確かに対象領域の諸要素は判断構造の中へと混入されるが、しかしそれは対象的原構造の同時的破壊の際に起こるのだ、ということが明らかになるからである。諸対象は、犯しがたいものとしてではなく、切り刻まれたものとして、そして唯、孤立的要素でもって、判断の「形式」に対する「質料」を形成するのである。模造的構造は変形という意味での「形式」なのである。判断の「形式」—「質料」というスコラ的概念対に対して、此の特別な副次的意義が与えられれば、そしてその際「形式」が、細分化する改造者として、「素材」が加工されるべき対象として考えられ、したがってこの概念対が認識理論的な—含蓄のある添え味と共に把握されるならば、そして個別化された質料の可変性に対する形式の普遍性のみが注目されるのでないとすれば(上記s.86参照)、そのときに考えられることは、論理学のコペルニクス的定位置に於いて「形式的」論理学と「質料的」論理学は非対象的領域と対象的領域へと割り当てられねばならない、ということなのである。

しかしカント以来始めて、形式的論理学一般の概念が与えられるのである。即ち、カント以前の全論理学が形式的なものとして洞察されることができるのである。(s.111) カントの革命以来「形式的なもの」はもはや論理的なものではなく、論理的なものの一つなのであり、論理学の総体的範疇は形式論理的なものと、

素材的(質料的)論理的なものへと分裂するのである。たしかにそれによって、まさに単一的に非対称的なものと一致する形式的論理的なもの、完全に確定的な概念が固定される。この非対象性のより精密な意味にとっては、やはり、対象的—論理的なものの優位が、厳密に守られねばならない。非対象性とは諸対象に対する距離を意味するのだが、それは対象に対する優越という意味ではなく、対象に到達しない、という意味での距離なのである。次のような考え方—即ち形式的論理的なものは、より高い論理的領域として、即ちまだ全く対象に達しておらず、対象には尚、無関心な「純粋な」ロゴスのより高い論理的領域として、先験的論理的なものの上を漂っているのであり、その領域はそのときはじめて、諸対象を取り入れることによって、また諸対象へ適用されることによって、素材的論理的なものへと狭められるのだ—というような考えは、なされてはならない。むしろ反対に、形式的論理的なものは、理論的オルガノン(器官)として—理論的理法(Oekonomie)全体の中で、その(器官の)職務と手段を設定することに於いてのみ、諸対象に対して把握されうるオルガノンとして明らかにされた。形式的論理的なものの所謂対象に依属しない独立性と明瞭性は、ただ対象を度外視する執拗さを通して虚構され、その(対象の)地盤の上に始めてその要素を司る複合として構築されるのである。しかしこの形式論理的諸現象の適用可能性の全体は単に次の事情—即ち、現象が諸対象の内部での最終的相違を越えた対象的原構造にも、即ちカテゴリーとカテゴリー素材への分裂性にも、また結び付けられ、後からの錯綜としてまさにこの現象について余すところなく理解されるという事情—のおかげをこうむっているということ、このことが考慮されるべきである。(s.112)今や確定し得るのは、この意味で、判断論は一義的に「形式的論理学」に属しているということだ。というのはここで主張された解釈によれば、その領域に属するのはあらゆる非対象的論理的現象であって、所謂「形式的真理」の単なる形成物などではないのである。

しかし対象的領域の中には、論理的原現象が存在するだけでなく、まさに理論的なものの特殊なもの、即ち理論的な領域一般に対して刻印を記すもの、或いはそれをすべての非論理的なものから区別するものももつぱらそこに座を占める、という対象的—論理的なものの優位が、先鋭的に守られねばならないのである。カテゴリーは特殊理論的内容を包含するのである。カテゴリーの中に沈んでいかねばならないのは、理論的なものの固有の意義内容を知ろうとするものである。それはまさに「概念」、「判断」そして「結論」というようなあらゆる構造的錯綜の中に、したがって、前カ

ント的論理学が、そこにおいて全く本来的に理論的なものが具体化されているのを見るに違いないところの形成物、すべての固有の「形式」の中には欠如しているものなのだ。この二次的な理論的現象の特異性は、まさに次のことのうちに存在する。それは、この特異性の意味、即ちその構造的固有性それ自体、つまりその「形式的」本質が、あらゆる「内容」を度外視することによって理解されうる、ということなのだ。つまりその現象の特異性は、あらゆる対象的な—それゆえコペルニクス的解釈によれば—あらゆるカテゴリー的な内容つまり特別に理論的内容を完全に度外視することによって理解されうるということのうちに存するのである。実際、判断領域に対して基準となる質の定立が表現するものは、特殊理論的な妥当—価値現象では全くなくて、最も普遍的なそれなのである。しかしその(質の)特殊、理論的な混入を支えるのは真理と反真理であり、また、肯定と否定である。(s.113) そしてそれは(真理と反真理等の)構造的特質それ自体を通してではなく構造諸要素が特殊理論的な要素、即ちまさにカテゴリーとカテゴリー素材以外のものではない、ということを通して起こることなのである。それによって始めて対立性一般が理論的対立になるのである。それゆえ構造現象の特殊理論的刻印は全く一般的に、常に諸要素から—すなわち、それらの現象に於いて、それによって操作がなされることでの諸要素から、つまりその現象の「形式」からではなく「素材」から由来するのである。まさに、前カント的論理学の唯一のテーマが形成したものは今や—そこにおいては本来の理論的有意義性が際立って現れてくることなど全くないような—現象の周辺として示される。

判断構造の非対象性と、次のこととは—すなわちそれ(判断構造)に対してその素材の中で一義的に対応するのは、判断の組織構造の内部ではあっても、それに固有の構造を失うところの对象的構成要素、すなわち対象的原構造である、ということ、このこととは—矛盾しない。そうでなければ判断構造を先験的非論理的領域へ編入することや、それ故、メタ文法的述語理論全体は決して可能ではなかったであろう。このように一面で、対象的原構造の諸要素が判断構造の中へ突出している、ということ、しかしそれ故それらの要素はここでは原像的構造を放棄して模像的構造の中へ入っていくのだという洞察は更にメタ文法的述語理論に対するあとがきを与える。カテゴリーとカテゴリー素材はたしかにあらゆる理論的構造分析の真の対象から取られた原像的構成要素として表現される。しかしそれらは「主語」「述語」としては、既に模像的構造状態の中へと置き移されていると考えられる。すなわちそれらはたしかに判断の彼岸にある領域から取られたとは

いえ、やはり既に判断構造の内部での自らの地位にしたがって特徴付けられるのである。(s.114)というのは、それによれば諸カテゴリーが、明確に賓述されたものとして特徴付けられ、また素材を形式の中へと置きいれることが問題となるところの(判断構造の)主語—述語の性格が前提するのは人為性である。即ちそこに於いて単にカテゴリーにおける素材の成立が与えられるところの原像的状態の分裂は明らかに、それ自体において出来上がっていて分裂していない全体性において成立するものを後から寄せ集めることとか築き上げることを前提しているのである。それ故主語述語の関係を対象的原像状態におけるカテゴリーとカテゴリー素材に対して用いることは不当である。そこに於いてはむしろただ、次の如き構成要素が与えられている。それは即ち細分化の後で、主語と述語として機能することが適任であるが、それ自体においては、諸対象において前主語的な種類の、そして前述語的な種類の現存在を導くような構成要素なのである。

判断が対象に対して立つのと、やはり同じ距離で対象に対して立つのは、このような観点で判断と完全に一致する「概念」である(上記s.49f,s.67ff参照)。一方「推論」と「形式的真理」のその他の形成物は、非対象性という更に大きな距離に於いて存在する。

まさにここで確定された非対象性という意味で、前カント的論理学は、最も際立った形では「形式的論理学」として見なされはしないだろうということ、このことはたしかに周知のことである。しかしカント以来の哲学全体の中で、諸対象が論理的なものに対して、彼岸的として見なされる限りは、実際、論理的なものは、ただ非対象的なものとして、それ故この意味で単に形式的な意義のみを持つものとして考えられうるのである。それにも関わらず、論理的なものの存在論的—形而上学的意義について語るとすれば、これは先ず第一に次のような意味で—即ち諸対象が確実にロゴスの彼岸にある、ということ、そして論理的なものが対象の此岸にあるということ、こういう特性と和解可能であるという意味で一考えられうるのである。(s.115) 前カント的、根本的見解の地盤の上では、即ち論理的なものどんなに高い対象的意義も、実際結局は常にただ、まさにロゴスとは疎遠な諸対象がそれ自体まさにやはり非対象的なままである論理的領域の中へと突出するという結果になるのである。しかしそれは理論的側面で新しく付け加わるすべての構造的現象にも関わらず、またそれらの現象を通して、少なくとも諸対象と対象的分析の非常に広範な真の反映が承諾されるということ以外のことを意味することはない。それゆえ明らかにされたように、確かに判断的生成物に対して、一義的に対応するのは対象的原像的分節化である。

しかし、まさにただその分節化の単なる、しかしいずれにしても変形された「素材」として対応するのであるが、判断の固有の「形式」が模倣性についての何かを示すことはないのである。おそらく真理の関係に対しても、三段論法に対してと同様のことが仮定され得るであろう。このことが一般に正当なものとされるとすれば、ここでもまた存在論的意義は、三段論法的現象自体にふさわしいのではなく、ただ反対に三段論法の中で解釈されうる「素材」にふさわしいのである。もし我々が対象的な重要性を見出すとするならば、以前にメタ文法的な、そして判断の彼岸にある、構成要素に頼ったように、ここでは超三段論法的な、そして三段論法へと単にはめ込まれただけの構成要素に頼らねばならないであろう。

しかし前カント的論理学、換言すれば、アリストテレスの論理学はこのような論理的なものの対象的意義という控えめな限度に満足していたわけではない、ということ認められるべきである。実際諸対象において全く現れてこない構造的錯綜に依存している模倣的現象は、それにも関わらず、同時に対象の構造をも模倣するということになるのである。(s.116) この意味ではアリストテレスの場合には実質的存在と概念、内属の関係と判断的組織、形而上学的実在的な基礎付けと論理的な基礎づけ、これらが互いに対応する。しかしまさにそれ故に、結局明らかにされねばならないのは、ここでは無理に一緒にされえないものを一つにくっつけようとする試みがなされる、ということである。それ故形而上学に対するアリストテレスの論理学の関係についての様々な見解が支配するのである。同じ理由で、他方において、彼が形式的論理学を営むつもりであったということが疑いのないことであると同様、形式的論理学がそれらの見解に基づくことができたのである。

次に、特に際立たせられる価値があるのは、カント自身において、形式論理的な、また先験的論理的な領域がここで行われるのとは違った仕方規定されているということである。二つの領域が、二つの総体の如く、非対象的な、また対象的な要素に対立している、ということ、そして先験的論理学の創造が、対象自体の中へまで広がっていく論理学の新しい区域を獲得することに存するという、これらのことは確かにカントにとっても疑う余地はない。しかしそれらの領域の疑いなく単に形式論理的な意義と非対象性にも関わらず、やはり非対象的形式の系列は、とにかく対象的カテゴリーの発見の「導きの糸」として用いられることができる、という性質を持っているべきである。カントにとっては二つの異なった論理的領域は、互いに次のような仕方分けられるのではない。つまり、

一つの領域では構造的錯綜が現われ、他の領域では、その錯綜について何の痕跡もない、というような仕方とか、また対象的諸要素が対応しつつ形式論理的現象の中に、何ら模倣的相関者を見出すことがない、とか、そしてまた、先験的論理的要素が素材として非対象的形式の中へ混入され、そしてたとえばこの根拠から認識されうるようになる、などといった仕方分けられるのではないのである。(s.117) 自らの判断表と、範疇表によって、カントは論理的要素の設計を企てた。それも分析的統一形式と総合的なそれとの間の正確な対応によって企てたのである。我々はいわば、前者をただ諸対象一般に関連させる必要がある。そしてそのときカテゴリーが発生する。対象的分析に対して構造的剰余を示す代わりに、形式論理的現象は、むしろ対象論理的形式的空洞化し、褪色した代役として現れる。形式論理的領域が、対象性の模倣的アナログンを表している、という見解は、ここで首尾一貫して貫徹されている。そこからは次の如き結果が生ぜざるをえない。もしも判断表が、すでに秘密のうちに範疇表のようなものへと形を整えられているような場合を度外視するとすれば、そして、判断表が常に真に形式論理的現象を含んでいるということをついたん仮定するとすれば、カテゴリーをそれから「演繹すること」にとっては二つの場合がある。諸カテゴリーが真のカテゴリーである場合。この場合には、それらカテゴリーは、単に外見上判断表から演繹されるに過ぎない。つまり、まさにあらゆる対象の内容が、そこから落ちてくるに違いないところの、真の形式論理的構造的錯綜からは、対象的形式は全く演繹されることはできないのである。このような場合は特に「関係」のカテゴリーにあてはまる。他の可能性が成立するのは、カテゴリーが真の対象的形式では全くなくて、単に形式論理的現象を対象的なものの中へと不当に投影した産物であるに過ぎない、ということのうちに於いて、なのである。この場合、事情は質と様相に関して存在する。この論文のテーマに対して、特に興味深いものとして際立たせられるであろうと思われるのは、肯定と否定における肯定作用と否定作用に対して対象的(客観的)にカテゴリー的代理物が付け加えられている、ということである。(s.118) めったに留意されることはないが、カントはこれによって否定に(或いは肯定に)対して客観的意義を与える人々の系列に加わることになる。それ故カントの判断表はあらゆる論理的領域からの論理的形成物をかくまっているのだ。

カテゴリーに属するための基準は、いずれにしても全く違う仕方獲得されねばならない。そのカテゴリーの論理的場所は、しかし今や、少なくとも原理的に最も鋭く際立たせられる。カテゴリーは客観的領域に

属する内容形式として表示される。その構えは、それ故一面ではそのカテゴリーの客観的意義を通して、即ち非対象的領域に対する距離を通して、次に内容形式と構造形式との区別を通して規定される。

カントの先験的論理学は、初めてカテゴリーを論理学の分野に引き込むことによって、大体に於いてあらゆる構造的論理学を超えている巨大な革新をもたらしたのである。それによってカントの論理学が発見したのは、論理的なものの内容に他ならなかったのであり、その内容は以前述べたように（上記s.112参照）、もっぱら対象的領域にその座を持つのである。それが常にただ、結合性、分節性、状況と関わりあった、あらゆる構造的論理学に対する「素材的」性格の最も深い意味である。

対象的領域自体の論理性を明らかにすることを通して、コペルニクスの業績が二重に成し遂げられるのである。それは対象領域の中で支配的な、一つの新しい構造形式を明らかにした。そして更に対象的構造形式の内部で、先験的論理学的形式の構えが差し向けられるところの、論理的内容へと進んでいくのである（上記s.56参照）。（s.119）それと共に、前カント的論理学に対して素材が与えるもの—即ち対象—の中へ、そして二重の観点から見れば、区別が、形式的要素、素材的要素の中へと運びいられる。先ず諸対象は今や構造的な形式へと（カテゴリーとカテゴリー素材の相互内在）、そして構造素材へと（カテゴリーとカテゴリー素材へと）解体される。この視点の下では、最終的素材を形成するものは、対象ではなくて、対象的構造素材としての対象的構造要素であり、それ故カテゴリーとカテゴリー素材である。しかし、次に他の視点では対象的構造諸要素は形式と素材としての構造形式の内部で対立する。この観点に於いては、カテゴリー素材は最終的、最後の素材を形成する。

したがって形式的要因と素材的要因という二つの概念が与えられる。即ち構造形式と構造素材という概念と、カテゴリー形式とカテゴリー素材という概念の二つである。さてしばらくの間、構造形式ということによって、非対象的構造形式のみを考えるとすれば、二つの概念対は論理学の二つの時代に割り当てられる。しかしその際常に形式は、理論的なものの特異や、また認識の機能と連带的である。しかしまた、コペルニクスの時代には、対象的—論理的なものと同様に二次的—理論的なものが妨げられずに存立していると同様、カテゴリー的形式概念と並んで前コペルニクスの形式概念も存立している。二つの異なった意義をもつ認識概念が一致して、並びあって力を保っている。しかし常に理論的領域とか認識とかの意味は理論的素材や、認識の素材を理論的形式や認識形式の強制力の中

へともち込むことにあるのだ。（s.120）つまり形式—素材—概念に応じて認識作用が意味するのは、素材的に該当していない、したがって、いわば対象以前の素材を対象性の序列へと高めるカテゴリー形式へと—即ち他の意義にしたがって素材を作るものが、最初にそれを通して構成されるところのカテゴリー形式、すなわち対象へと—高めることである。このような、以前にメタ文法的述語理論の基礎となっている先験的論理学の意味での認識とは即ち、カテゴリー的に該当しないものを、論理的カテゴリー形式の強制力の中へと運び入れることである。しかし第二の意味では認識とは原料としての対象を原料を改造する理論的構造形式へと押し入れることである。第二の論理的なものに対しては、確かにまた、実際、第一の論理的なカテゴリー内容を隠しているところの諸対象は彼岸的な把握の素材を形成する。しかし認識総体においては、両者は統一されている。そこでは諸対象を模倣的認識形式を通して、すなわちカテゴリー素材をカテゴリー形式へと置き入れる道具としての形式を通して、克服する作用が働いているのである。

形式概念の二義性によって、まさにあらゆる論理的現象は内容形式と構造形式に従って分類することができる。この二つの種類の形式を分離する場合に、論理学における方向定位が存在することになる。それに反して、形式概念が、そこに於いて何かある役割を演じるような言い回しはすべて、このような分離がなければ、同じ二義性に苦しまねばならない。理性的な認識因子と経験的なそれとの対立のすべてにおいて、また思索の持ち分と認識の持ち分との「境界づけ」、「学の諸形式」の「境界づけ」のすべてにおいて、カテゴリー的内容形式と二次的構造形式現象は混同される。

しかし今や明確に付け加えられねばならないように、二つの種類の形式の分離は、対象的現象と非対象的現象の分離とは全く一致しない。むしろそれと交差するのである。（s.121）先ず確かに構造形式が対象的領域の中にもある。反対に構造現象以外の非対象的領域においてはカテゴリー的形式も主張されている。カントが誤って構造的錯綜について確定したもの（上記s.117参照）、それはこの非対象的「反省的」カテゴリーに当てはまる。即ちそれらのカテゴリーは対象的に論理的な現象の色あせた並行的現象である、ということである（注1）。自らの非対象性のために、この論理的諸形式はカテゴリー的内容形式を表現しているとはいえ、またコペルニクス以前の論理学によって論理的なもの領域へと引入られ得たのである。というのもそれらの形式は実際また、非対象的論理的契機として「形式的論理学」に割り当てられるからである。

注1)それらについては『哲学の論理学』s.139以下参照

さて、しかしカント以前の論理学は完全に構造的錯綜に、つまり構造的形式において定位されている。そしてコペルニクスの業績がはじめて論理的なものの固有な内容の発見に導いたのである。それ故、反省の対象カテゴリーは、構成的対象カテゴリーからのみ、その下位の分枝として理解されるのである。前カント的論理学は、それ故、途方にくれてそれらのカテゴリーに向かい合わせなければならないのであり、またそれらの特殊な地位を論理的内容形式として洞察することができるのである。したがって、カント以前の論理学がそれらのカテゴリーをして、構造的現象の中に避難所を見出さしめ、そして同一性を矛盾と、他者性を否定と、そして普遍に対する特殊の包摂関係を判断と三段論法とに、それぞれ関係付けた、ということが非常に特徴的なのである。カントにおいても反省のカテゴリーはその他の形式論理的現象のほかには何ら特別な場所を見出さない。そしてたとえばロツツェにおける如く、論理的なものの、単に「形式的意義」が示されるべきであるところでは、反省的—カテゴリー的現象と、構造的現象とが、同様に区別なく、並びあって扱われるのである（注1）。

注1) ロツツェ『論理学』第3巻 第4章

(s.122) 内容形式と構造的形式とを混乱させることは、しかしまた、カテゴリー理論自体にとっても有害となっているのだが、それは反対に、考えられるかぎりの対象的な内容的な種類の現象が、非対象的な構造的な種類の現象と同様、カテゴリーとして際立たせるという習慣が起こることによるのである。構造的現象をカテゴリーの系列の中へ組み込むことの誤りは、もちろんカントのカテゴリー表にも付着しているし、カント以前、以後の多くのカテゴリー論の構想にも付着している。

歴史的にはまさに、カント哲学は二重の形式概念の舞台になったのであり、その証拠としては、論理学のコペルニクスの時代においては、古い形式概念と新しいそれとが並びあって生じているということである。カントが「形式的」論理学の概念を確定しているところでは、カントにとって非対象的な「単なる思惟の形式」に対して、また「内容」或いは「素材」としての悟性形式に対して、常にまさに「対象」或いは「客体」が対立している。それ故云うまでもなく、単に分析的な統一の契機は、それ自体として「単なる論理的形式」として、「あらゆる内容を除いた」即ち対象への関係を除いた「論理的機能」として表示される。そして形式的論理学は諸客体の、ひょっとして起こるかも知れない「経験的な」或いは「先験的な」構成要素に対してと同様、諸客体のあらゆる区別に対しても無関心なものとして特徴付けられる（注2）。確かにカントには、

この「思惟一般の形式」、「単なる認識の形式」、「悟性と理性の普遍的で形式的法則」を「真理の形式」、或いは「形式的真理」へ「認識と互いに重なり合った関係での論理的形式」へ、即ち真理関連の領域へと一彼の見解に従えば最高の原理として、矛盾の命題が支配するところの領域へと一狭めるという傾向があった。

注2) 序 B.IX, B.77ff, 79ff, 170, 171ff, 『論理学』序 VII参照。分析的統一形式については、A.95, B.175, 267, 298, A.245, B.346, 377 参照。

(s.123) というのも彼は一般に判断の模像的形式を、判断相互の「形式的」関係へと、即ちこの相互内包的存在という最も狭い意味での「分析的なもの」へと解消する傾向があるからである（上記s.33参照）（注1）。さて、しかしこの形式論理的な形式概念との相違に於いて、まさに新しい形式概念を持ち込もうとする理性批判の全体的意図が形成される。それは形式論理的なもの「内容」の中へと、つまり「対象」の中へ新しい形式概念を持ち込もうとするということである。そして更にその意図は素材と悟性形式とに分解する作用を持ち込むことである。云うまでもなく、この先験的形式概念は純粋理性批判の全体を支配している。

それゆえこれまでに形式概念の多様性の全体が現れている。その最上位の分割は内容形式と構造形式とへの分割であるが、それらの形式は再び非対象的な形式と対象的なそれへと崩壊する。非対象的構造形式は、決して模像の意味をもたない形式（「形式的真理」）と模像の意味をもつ形式とへ分離する。後者は判断領域へと属する。その内部ではこれと反対に、形式—素材—関係の構成物が存在する、ということはすでに以前話題になったが（上記s.68）（注2）、しかし先ず第三章第二節でより厳密に扱われるべきである。

注1) B.79f, 82ff, 599f, 『論理学』序VII参照。

注2) 形式概念、素材概念の段階的構築物は、ベルクマンに於いて最もよく注意されている。『純粋論理学』49f, 57ff参照。しかしベルクマンにおいては決してこの論文で主張された傾向—即ち形式をそれが高ければ高いほどまさにそれだけ人為的なものであるとみなす傾向—が支配してはいない。